



一般社団法人 日本フードサービス協会

ジェフマンスリー

2015 01

2015 January No.428



特集

日本フードサービス協会 (JF) 創立40周年
記念式典／記念講演／記念パーティ

日本フードサービス協会（JF）

創立 40 周年 記念式典

2014 年 12 月 4 日 於 帝国ホテル東京

創立 40 周年を迎えた一般社団法人日本フードサービス協会（JF）は、12 月 4 日午後 2 時半より帝国ホテル東京にて下記の次第で記念式典を執り行い、オリンピックの銀メダリスト太田雄貴氏と登山家栗城史多氏の記念講演を拝聴した後、午後 5 時半より記念パーティーを開催した。

- 櫻田厚協会会長式辞

40 周年記念スライド「協会 40 年の歩み」の上映

- 農林水産大臣祝辞（櫻庭英悦食料産業局長代読）
- 櫻庭英悦食料産業局長より農林水産大臣感謝状授与
受賞者を代表して重里欣孝副会長より謝辞
- 櫻田会長より協会会長表彰
- 唐木英明公益財団法人食の安全・安心財団理事長より祝辞



協会ファウンダーと歴代会長（左より）井上修一氏（第 9 代）、小坂哲瑋氏（第 4 代）、奥住正道氏（協会ファウンダー・顧問）、田沼千秋氏（第 13 代）、佐竹力總氏（第 14 代）、米濱和英氏（第 12 代）、横川竟氏（第 11 代）



櫻田厚協会会長式辞

歴史と伝統を味方に課題に取り組む



日本フードサービス協会（J F：ジェフ）が40年という長きにわたり数々の足跡を刻むことができましたのは、会員各社の皆様のご尽力の賜物であります。同時にお客様、お取引先の皆様、また、農林水産省をはじめ関係省庁、並びに関係の皆様方のお力添えをいただいていたことに対し、厚くお礼申し上げます。

協会創立当時は5兆円にも満たなかった外食産業の市場規模は、今や23兆9千億円（2013年）となり、国民の食生活を支えると同時に、全国に65万4千の店舗を設け、469万人の働き手を擁しています。私どもは、今や日本の雇用と地域経済を支える、文字どおり存在感のある産業となっております。

外食産業は、今、次世代の若い経営者が新しい感覚で事業を立ち上げ、経営を引き継ごうとしていま

す。時代の転換の中で、大きな可能性と夢のあるすばらしい業界であると確信しています。

これまでに協会に集った先輩方^{つど}のたゆまぬ努力があったからこそ、今日この日を迎えることができたのであります。

協会は、創立以来の歴史と伝統を強い味方にしながら、直面している課題に真正面から取り組み、新しい時代に対応した外食産業を創り上げてまいります。協会創立の精神に立ち返り、会員一丸となって果敢に取り組むことを決意するものです。

本日ご出席の皆様、並びに関係者の皆様には、重ねて40年にわたるご支援に感謝申し上げますとともに、今後一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、会員各社のさらなるご発展を祈念して式辞とさせていただきます。

日本フードサービス協会が取り組むべき今後の課題

外食産業が担う役割を踏まえ、新しい時代を切り拓いていくため、協会は、次の課題に取り組んでまいります。

第1は、外食産業は、「おもてなし」と「しあわせ」の産業です。

私たちは、おいしくて健康な食の提供、安全・安心の確保に努め、おもてなし精神にあふれたサービスをめざします。

第2は、外食産業は、インバウンドとアウトバウンドの国際化の時代に入ります。

私たちは、「食と農との連携」をさらに深めるとともに、日本の食文化の普及、輸出の拡大など海外展開を促進します。

第3は、外食産業は、働く人々の喜びがお客様のしあわせをもたらします。

私たちは、「ピープルビジネス」として、多数の働き手が意欲を持って生き生きと働くことを通じて、お客様へ最高のサービスを提供することをめざします。

西川公也農林水産大臣祝辞 (櫻庭英悦食料産業局長代読)

一般社団法人日本フードサービス協会創立40周年記念式典の開催に当たり、一言お祝いの言葉を申し上げます。

この40年間、外食産業の皆様方におかれましては、経済成長、食の嗜好の変化、

女性の社会進出、少子高齢化などの社会の変化に的確に対応され、その結果、国民は豊かでバラエティに富んだ食を選択できるようになりました。

また、外食産業は、農林水産物の重要な供給先であり、皆様方は、各地域の産地と外食事業者の交流会を開催するなど、長年、外食産業と農林水産業との連携にも熱心に取り組んでこられました。こうした皆様方の御尽力に對しまして改めて敬意を表する次第です。

今後とも外食の振興を図るためには、皆様方の引き続いたの御尽力により、消費者の信頼をこれまで以上に確保し、外食の社会的使命を発揮されることが重要になると考えております。

とりわけ、我が国の食は、昨年の「和食」のユネスコ無形文化遺産登録に見られるように、世界中から注目を集めております。その背景には、日本の食の「味」の良さはもちろんですが、相手を敬い、誠実に食を提供するという「おもてなし」の心が諸外国において高く評価されているためと考えております。

今後、皆様方をはじめ先人達が築き上げてこられたこの評価をますます高めるため、お客様とのコミュニケーションを深め、外食産業への理解の向上を図ることが重要になってまいります。

来年のミラノ万博や2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会と世界的なイベントが続きます。貴協会におかれましては日本の食の魅力を世界に発信する観点からも、消費者の満足度の向上を図る取組をさらに進め、外食産業が一層発展していくためのリーダーシップを発揮されますことを大いに期待する次第です。

結びに、皆様方が本式典を機に一層結束を強め、業界の一層の発展のために御尽力されることをお願い申し上げますとともに、皆様方の御健勝と御発展を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。



唐木英明（公財）食の安全・安心財団理事長祝辞

日本フードサービス協会の創立40周年をお慶び申し上げます。

歴史を振り返ると、戦後の混乱期、人々は貧しく、食料は不足し、粗悪な食品が横行し、私が子供のころ、家族そろって外食をした経験は全くなかった。

その後、経済成長の中で食糧不足は急速に改善し、安全性も飛躍的に高まる中で、人々が外食を楽しめる時代がようやく巡ってきた。高い所得水準に支えられて外食が一般的になり、外食産業の成長が始まった。外食産業は今や24兆円という大きなマーケットを持つ産業だが、業界の成長を裏側から支えてきたのは日本フードサービス協会の地道な努力である。

協会は、外食産業の社会的認知、サービスの向上、従業員教育と福利厚生、環境問題への対応、食の安全の確保、愛の募金、阪神大震災や東日本大震災の復興支援、地域の活性化、そしてミラノ万博への取り組み、日本食の海外普及など、極めて広範な課題に精力的に取り組み、社会の発展に貢献ができる外食産業の育成、またその羅針盤としての役割を果たされた。

長い歴史の中で人類が常に求めてきたのは、食糧の確保、それから品質の確保、安全の確保であった。現在の消費者にはもう一つ重大な要求がある。それは情報である。その背景には食品および食品関係事業者に対する不安と不信がある。不安な食品を自分で排除するためにどんな情報もすべて表示してほしいという要求である。

日本フードサービス協会と食の安全・安心財団は消費者の不安を解消するため、消費者とのコミュニケーションで信頼回復を図るという基本方針のもとに、継続して活動している。外食産業に対する消費者の要求は美味しさと安全だけではない。楽しさ、満足、夢、やすらぎといった非日常的体験、すなわち「おもてなし」が求められている。

「おもてなしの心」で我が国の外食産業が国内でさらに飛躍するとともに、日本の枠を超えて世界に向けて羽ばたくことを大いに期待する。日本フードサービス協会のさらなる活動に大きな期待を寄せるとともに、外食産業のさらなる発展を心から祈念したい。



農林水産大臣感謝状受章者（敬称略）

前田太郎(株)ニュートーキョー顧問
 松山勝幸(株)ジェイアンドジェイ代表取締役社長
 正垣泰彦(株)サイゼリヤ代表取締役会長
 宮下雅光(株)ストロベリーコーンズ代表取締役社長
 幸島武西洋フード・コンパスグループ(株)代表取締役社長
 岸野禎則東和フードサービス(株)代表取締役会長兼社長
 重里欣孝サトレレストランシステムズ(株)代表取締役執行役員社長



農林水産大臣感謝状を受章した七氏

協会会長表彰受賞企業（五十音順）

協会会員として20年以上在籍し、前回の35周年記念式典までに受賞していない正会員・賛助会員に感謝の記念品が贈呈された。

【正会員】

(株)エーワンペーカリー
 (株)神田きくかわ
 (株)崎陽軒
 (株)キングベーク
 (株)KR フードサービス
 元気寿司(株)
 康正産業(株)
 ゴールデンイーグルグループ(株)
 コックドール(株)
 (株)サガミチェーン
 (株)三宝
 (株)ジー・テイスト
 (株)ジェイアール西日本フードサービスネット
 ジェイアール東日本フードビジネス(株)
 (株)ジェイアンドジェイ
 (株)ジェーシー・コムサ
 (株)ストロベリーコーンズ
 (株)大庄
 (株)つなハ
 デイ・ナイト(株)
 (株)ドミノ・ピザ ジャパン
 日本サスウェイ(株)
 (株)ハイデイ日高
 (株)ハイネット
 (株)ピーシーエス
 ヒューマンライフ(株)
 (株)フォーシーズ
 (株)フクナガ
 富士産業(株)
 (株)フジファミリーフーズ
 (株)升本フーズ
 マルシエ(株)
 (株)M i s u m i
 宮田企業(株)
 ユーシーシーフードサービスシステムズ(株)
 (株)ラケル



受章者を代表して協会会長表彰を受け取る鎌田敏行
 株式会社サガミチェーン代表取締役社長

【賛助会員】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
 アイン食品(株)
 五十嵐冷蔵(株)
 (株)大滝
 (株)オーヤラックス
 キスコフーズ(株)
 共栄火災海上保険(株)
 熊本製粉(株)
 国分(株)
 シーバイエス(株)
 大和住銀投信投資顧問(株)
 タニコー(株)
 (株)テスコ
 電通ヤング・アンド・ルビカム(株)
 東京シティ青果(株)
 凸版印刷(株)
 福島工業(株)
 富士通(株)
 (株)ホクビー
 マーケットメイカーズインク
 マルハニチロ(株)
 三井食品(株)
 三井住友信託銀行(株)
 山崎製パン(株)

記念講演会 夢、チャレンジ、感動の共有

業界が未来に向けてさらに飛躍するようにとの願いを込めて、「夢」「チャレンジ」「感動の共有」などをテーマに、太田雄貴氏おおたゆうきと栗城史多氏くりきのぶかずの若い二氏に講演していただいた。

講演の前には島村宣伸元農林水産大臣より二氏の世界での活躍が紹介された。

1985年生まれの太田雄貴氏は、2008年の北京オリンピックで日本フェンシング史上初となる個人戦銀メダル、2012年のロンドンオリンピックでは団体戦銀メダルと2大会連続で銀メダルを獲得し、その後、東京オリンピック・パラリンピック招致アンバサダーとして2020年の東京開催決定に貢献された。

1982年生まれの栗城史多氏は、大学3年在学中に単独で北米大陸の最高峰、マッキンリー（6168 m）に登



島村宣伸
元農林水産大臣

頂、以後合わせて6大陸の最高峰登頂に成功した登山家。酸素ボンベを使わずにベースキャンプから一人で登る単独・無酸素登山を実行し、その様子を生中継で世界に配信する、「冒険の共有」という新しい登山スタイルを確立された。

太田雄貴（おおたゆうき）氏

講演は元NHKキャスター藤本ケイ氏のインタビューに答える形で行われた。以下はその一部概要である。

目標からの逆算

マイナーなスポーツが注目されるためにはどうしてもメダルが必要だったので、メダルを取るために逆算した。まず他国の選手に比べて私個人は身長が低いし、手足も長くない。とびきりの才能があるというわけでもない。そこで、自分がメダルを取るために何をしなければならぬかを人よりもずっと考えた。

しかし団体戦になると個人の力だけではだめで、ましてや平均身長が世界で一、二番目に低い日本チームがメダルを取るためには、チームワークを高めないといけない。だからチームメイトたちとは、顔色を見ただけで彼らが何を考えているか分かるくらい、ずっと一緒に過ごした。オリンピックは一発勝負なので、勝ちたいと強く願うこと、自分のみならず皆の夢なのだという意識を持つことで、メダルを取れる確率は上がると思う。

個人で考え行動する

海外選手と日本選手を比べると、日本選手は個人で動

くことが苦手だと思う。私は大学生の頃から一人で海外に行き、いわゆる武者修行をしていたが、私より下の世代は海外のコーチを日本に呼んでいたの、海外に出かける機会が少なくなっている。また、数少ない海外遠征でも、チームの誰かが英語を話せば、その人について行くだけでよい。ホテルでもレストランでも、その人に任せておけば苦労なくてすむ。これはフェンシングに限ったことではないが、それではだめで、やはり個人で動ける、一人で何でも切り開けることが、今後日本で求められると思う。

そうなるためには、一步踏み出して、群れから離れて一人で出て行くことだ。一人で1週間海外へ出て行くだけでも、大きく成長すると思う。例えば、親の有り難さとか、毎日簡単においしいものが食べられる日本の良さに改めて気づくためには、やはり外に出て行くべきだ。

東京オリンピック招致活動

東京でのオリンピック開催については色々な意見があると思う。原発の問題も含めて、まだ日本がやらなければならないことはたくさんあると思う。ただ、それでも国際競争力という点から、やはり勝ちとらなければいけないと思う。オリンピックは待っていたら順番が回ってくると思われがちだが、海外の都市は死ぬ気で勝

ちに来ている。その中で「勝ちきることの大切さ」を、招致活動を通じて強く感じた。やはり勝ちきらなければいけない。そのためにプレゼンチームもロビイングチームも、もちろん政府関係や民間企業の方々も、一丸となって皆が頑張った。

私は現在国際フェンシング連盟の中にある選手会の会長をやっている。それは、ルールが変更されるのを待つのではなく、ルールが日本にとって不当に不利にならないように、積極的に世界に出て行くためだ。

太田雄貴氏



日本の食事

東京オリンピック開催が決定された後、日本が世界に誇れるものは何があるかと考えた。日本には自動車をはじめ色々な産業があるが、その中で一番海外に誇れるものは圧倒的に食事だと思う。オリンピックを契機にこれを何とか世界の人たちに伝えたい広めたいと思った。

私が海外遠征中にどうしても食べたくなる日本の食べ物は生魚だ。試合前には生ものに気を付けなければいけないが、私にとって寿司はかけがえのないもの。ごはんや味噌汁など、日本の日常食も食べたくなる。

かつてはこうした日常食を海外遠征に持参していたが、極力遠征先の食事を食べるようにウクライナ人のコーチから指導を受けた。「外の文化に触れて、どこでも戦えるようにしろ」ということだ。だから私は好き嫌いがほとんどない。

しかし私は日本の「食の文化」とか「美味しさ」は本当に素晴らしいと思っている。日本人は日本料理のみならず、イタリアン、フレンチなどでも海外で評価されている。私は、これは日本が誇る文化だと思う。寿司職人は世界中でニーズがある。この「食」という一つの大きなコンテンツが、これからの日本を支えてくれると思う。アスリートと食はすごく近いと思うので、食を通して日本の良さを皆に伝えていければいいなと思う。

栗城史多（くりきのぶかず）氏

栗城氏はなぜ登山を始めたのか。以下は同氏の講演のごく一部分にすぎない。詳しくは同氏の著作『弱者の勇氣』（学研マーケティング）、『一步を超える勇氣』（サンマーク出版）、『NO LIMIT ～自分を超越する方法～』等をお読みいただきたい。

夢は共有することで実現する

山登りということで、屈強な男を想像されたかも知れないが、私の身長は162センチ、この体で8000メートル級の山に上った。今日は三つのことをお話したい。

一つは、夢は共有することによって実現すると思う。「夢なんて持てないよ」という若い人に夢を持ってもらうには、夢を語る大人がいればいいと思っている。二つ目は、僕の大切なテーマでもある「ノー・リミット」、自分の中に限界を作らないこと。限界に達する前に自分の中に壁を作ってしまうと止めていることはないか。三つ目は、夢とはアイデンティティではないかということ。夢が叶うとか叶わないとかは関係なく、夢はその人にとっての大切な思い、魂だと思う。

僕は凍傷で9本的手指を第二関節から失ったが、8047mのブロードピークという山に単独で上ることができた。靴の紐が結べず、箸も持てない状態から復帰できた。ヒマラヤに登頂した世界の登山家の中には指をなくしている人が多い。寒いからではない。8000メートル級の山では酸素が地上の3分の1になる。デスゾーンという人間が生存できない世界である。そこに風速20メートルの風が吹き、気温は-35℃、体感温度は-55℃になる。人間の体の中で一番酸素が必要なのは脳であり、脳へ酸素を運ぶために、指先や足先から細胞を落としていく。これは人間の防衛本能で、無酸素登頂にチャレンジしている登山家には大変厳しい世界である。

登山資金を集めなければいけないという問題もある。日本では基本的に登山にお金のかからないが、世界で一番高いエベレスト（8848m）の入山許可は一人当たり約100万円。僕の夢は単独・無酸素でエベレスト登頂に成功するという記録作りではない。僕の本物の夢は、登頂する過程をインターネット中継し、たくさんの人たちと夢を共有することだ。チャレンジだから、当然成功もあれば失敗もある。その失敗も含めて夢を共有し、自分も何か目標に向かって頑張りたい、何かしてみた

栗城史多氏



いという人たちをどれだけ増やせるかというのが、僕の最大のチャレンジだ。

そのために、2009年からエベレストからインターネット中継を行っている。日本は携帯の電波があるから映像を飛ばすことができるが、エベレストには何も無いので自分でブースターと映像を飛ばす装置を担いで登っていき、8キロ離れた仲間に電波を飛ばし、そこから衛星回線3台を使って中継する。これを過去4回行ってきた。これが非常に高額で2カ月で5000万円以上のお金がかかる。

登山を始めたきっかけ

僕は生来こういうことができる人間ではなかった。登山を始めたのが二十歳過ぎで、それまでは全然こういうことが出来るようなタイプではなかった。僕は北海道出身で高校を卒業してからある夢のために上京した。ところがその夢はすぐに挫折した。そのあとはフリーター生活をしていて、そのアルバイト先でいじめのような問題に遭い、最後は人間不信になりアルバイトも辞めた。そのあとは半年間ニート生活をしていて、そんな僕が山と出会って180度変わった。

なぜ登山を始めたかといえば、東京にいた時、一つ希望があったためだ。ふたつ年上の彼女が北海道にいて、その人のことがものすごく好きだった。その人と将来結婚したいなと思い、ニートでは結婚できないと思い、どういう人が好きなのと聞いたら、条件が3つあった。第一に車を持っていること。北海道は土地が広いから車が必要である。第二に大学を出ていること。最後に、これが一番難しかったが公務員が良いと言われた。僕は別に公務員になりたかったわけではなかったが、自分でアルバイトして大学に入り、公務員の試験勉強も始めて、念願の車も彼女のために買った。そして彼女とドライブ

に出かけた。その帰り際に人生の中で信じられない出来事が起きた。振られたのだ。そして最後に言われた一言がグサッと来た。「2年間付き合ってきたけど、あまり好きじゃなかった。」

この2年間、彼女のためにアルバイトして頑張ってきたので、その一言が心に残ってしまった。翌日から原因不明の高熱が出た。風邪を引いていないのに熱が出て、それを境に学校へも行かなくなった。最後にはひきこもりになってしまった。本当に自分が駄目になっていくので、どこかで自分を取り戻したいと考えた。その時に人間とは何か、夢や目標に向かって時には苦しんだり、わくわくしたりするのが人間なのではないかと考え、チャレンジしてみたいと思った。二十歳の時だった。

その時に始めたのが山登りだった。実は僕を振った彼女が山に登る人だった。小柄な彼女が重たい荷物を背負って雪山に行くのである。スポーツの世界だと2位や3位になっても褒められるが、山は頂上に辿り着くか着かないかである。誰に褒められることでもないのに、なぜそんなことをするのか。自分には何が足りないのかを考えて山岳部に入った。そこには僕が師匠と呼んでいる先輩がいて、この人は恩人でもあり大変厳しい人だった。部員は師匠と僕の2人しかいなかった。最初は5人くらいいたが、あまりにも厳しいので皆が一斉に辞めていくのだ。最後の僕が辞めたら廃部になるということで、金、土、日といろいろな山に登った。先輩の口癖は「登頂癖をつけろ」で、チャレンジしたら絶対に上るまで帰ってこない人だった。雪山で天気が悪く「無理、限界です」と言っても無理やり連れて行かれ、気づいたら目の前に頂上があったという事が今まで何回もあった。38度の熱が出ているときも山に行けば熱が冷めるなどと訳の分からないことを言われ、無理やり連れていかれた。それで、もう辞めよう、続けられないと思っていたが、ところが、だんだん山が好きになっていった。

夢や目標はどんな夢や目標でも否定してはいけない。大人の人たちが「無理だよ」とか「お前にはできないよ」と言ってしまうと木の幹の成長がストップしてしまうことがある。僕が登山中継を続けているのは、この壁を取っ払いたいと思っているからだ。時には下山することもあるだろうが、たくさんの夢を否定せずに共有し、一緒に山に登っていく。そういう人たちがどんどん増えていったら良いと思う。

JF 創立 40 周年記念パーティー

記念パーティーは午後 5 時半より開かれた。協会(JF)の歴代会長・副会長、会員企業の皆様、来賓のキャロライン・ケネディ 駐日米国大使、林芳正前農林水産大臣、保利耕輔前衆議院議員、皆川芳嗣農林水産省事務次官、そして日頃よりご指導をいただいている各界の皆様、内外の JRO 関係者の皆様など、合わせて 800 名超の方々に参加いただき、会場は文字通り熱気に包まれ、盛大な 40 周年記念パーティーとなった。



来賓祝辞（時系列）

（上左）皆川芳嗣農林水産省事務次官

（上右）キャロライン・ケネディ 駐日米国大使

（下左）保利耕輔前衆議院議員

（下右）林芳正前農林水産大臣



壇上の歴代会長を代表して挨拶する小坂哲瑯元会長
手前中央は奥住正道協会ファウンダー・顧問



キャロライン・ケネディ 駐日米国大使も出席され、
櫻田会長と握手



立錫の余地もないパーティー会場



中締めの挨拶をする佐竹力總
外食産業ジェフ厚生年金基金
理事長